慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヒルファディング経済学における理論と歴史：「金融資本論」の学説史的評価をめぐって
Sub Title	R. Hilferding's system of political economy : a note
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.7 (1969. 7) ,p.729(67)- 746(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19690701-0067
Abstract	
Notes	平井新教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690701-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と民衆とのあいだの一般的なとりもち役である。」「もしも貨幣が，わたしを人間的な生活に，社会をわたしに，わたしを自然や人間にむすびつけるきずなであるとすれば，貨幣はあらゆるきずなのなかのきずなではないだろうか。」(27)

このように，ここでの貨幣の把握は，人間を自然や社会にむすびつけるきずなとしてとらえる点で前進を示してはいるが，いぜん，なぜ貨幣は人間と人間を結びつけることができるのか，どのようにして結びつけるのかについては何もこたえず，この進歩は「要綱」の貨幣把握の立場からみれば，余り高い評価は与えられないのである。むしろ，ここでの最大の評価は，「分業」や「交換」とひとしく，「貨幣」の本質もまた，「人間の疎外された本質，自己を外在化し譲渡しつつある人間の類の本質にほかならない。貨幣は人類の外在化された能力である」(28)としてとらえられ，したがって分業や交換とひとしく，もう一つの類の外在態としての階級関係，資本と賃労働の支配関係との関連の問題がはっきりと提起されていることにみとめられるだろう。結論的にいえば，この手稿の貨幣批判に関する進歩は，貨幣批判そのものに由来するというよりは，その外に，労働疎外論に由来するというべきであろう。マルクスは労働疎外論をうちたてることそのことによって，二次的に，それともう一つの類の疎外態たる分業，交換，そして貨幣との関係をみずからに問わざるをえないことになった。事実「ドイツ・イデオロギー」では，疎外論に代わって分業論が，中心的な概念となって場処を占めることになるのである。

後記　学生時代をふくめ 20 年にもなろうとする長い間，浅学非才の身を御指導くださった恩師平井　新教授の御退任にさいし，心から感謝の意を表させていただきたい。

注(27)　K. Marx: Manuskripte, S. 565. 訳 163—164 頁。
(28)　Ibid; S. 565. 訳 164 頁。

ヒルファディング経済学における理論と歴史

——『金融資本論』の学説史的評価をめぐって——

飯田　裕康

1.　序
2.　ヒルファディング経済学の構造
3.　『金融資本論』の論理構造と信用論
4.　マルクスからヒルファディングへの理論的継承
5.　ヒルファディング経済学の現実的・歴史的立脚点——まとめ——

1.　序

20 世紀初頭の 10 年間は，帝国主義段階という資本主義の新たな発展段階の画期であった。この時期は，たんに，資本主義経済組織のみならず，それを分析し，再構成すべき経済学そのものにとっても転換期をなした。帝国主義論なる理論領域の生成は，その事情を端的にものがたるものである。資本主義自体の画期が，自由競争の支配的な段階を経過しつつ内的・自生的に新たな段階へ突入してゆかざるをえなかったのと同じく，経済学の側においても，20 世紀に入って帝国主義がはじめて論議の対象とされた訳ではない。マルクス死後，マルクス主義経済理論の発展を担った人々の問題意識のうちに，このことは避けられ難く喰い込んだのである。エンゲルスによる 70 年代以降，とりわけ，「大不況」期の資本主義の変貌の率直な認識(1)，またかれ以後の，ドイツ社会民主党内での修正主義論争等をつうじて，この事情は明白となる。レーニン『帝国主義論』に一つのピークを見いだす帝国主義論は，これら 19 世紀末年以来の長期の論争の成果といっても過言ではない。しかるに，この論争過程が，マルクス主義とくに経済学に，どのような方法的な問題を提起したのかということにかんしては，今日まで，十分検討がなされてきたとは言い難い。というのも，19世紀から 20 世紀にかけての世紀の転換期は，いわば下部構造（経済的・物質的土台）の変化としてまず把握され，その把握をマルクスの方法においてではなく，たんに理論的適用の問題として処理されてきたということである。なるほど，独占段階を法則的に解明するべき独占理論の展開は，レーニンの帝国主義論によって，理論的には措定された。しかし，方法的に，どれだけ発展してきたといえるであろうか。

注(1)　帝国主義にかんするエンゲルスの見解については，降旗節雄「エンゲルスと帝国主義」『思想』1969 年 6 月が興味深い分析を示している。

資本制生産は，一つの特定の生産様式としては，一般的な，資本それ自体を歴史的規定性なしに，そのような意味において合理的に表現しようとする。経済学の歴史が示すごとく，「原理」への要請の昂揚と沈滞とのくりかえしは，一面このことをものがたる。しかし他面，このことはまさに，資本制生産の歴史的規定性，それゆえ資本制生産様式の内的論理からみれば，非合理な側面の存在を顕示してもいる。このような二側面をそなえることは，経済学にとって不可避であった。古典派経済学の歴史が，そのことを如実に示している。こうした性格は，むろん，同一の思想的立場にある体系の内部においても避けられない。マルクス主義経済学のマルクス以降の歩みが，つねに同一の体系を前提しつつも，いくつかの流派に分裂していった事実から，それを知ることができる。これらの過程は，いうなれば，「原理」自体の意義を否定するというより，「原理」を体系内のあるべき地位に正しく置いて，それと一定の構造的連関のうえで，過渡期の論理ともいうべきものを用意することなのである。この「過渡期の論理」と「原理」との統一的融合にこそ，真の意味での方法が存在することになる。

古典派経済学は，この統一を，アダム・スミスとリカードとにおいて，それぞれの歴史的な役割の特殊性に規定されつつ果していた。しかし，スミスによって提示され，リカードによって克服され形式化する方向をみいだしたこの方法は，その後継者たちによっては，まったく，かれらが直面する資本主義的現実の矛盾を，対立・矛盾として理解しないことのために，したがって，悪しくイデオロギー的に採用された。その方法は，実質的に拒否された。他方，カール・マルクスは，近代市民社会の歴史的な運動の論理としての，ヘーゲルの弁証法的立場をうけつぐことによって，市民社会の育んできた生産力的成果のみならず，思想的・方法的果実をも汲みとって，批判と総体認識の方法を提示した。これによって，資本制社会ははじめて，真に客体的定在として措定され，同時に，客体的に措定する主体の方法的態度を強制し，それに主体の対象化の対象という地位を与えられた。いいかえれば，資本主義を，たんに分析さるべき，客体的対象としてのみとらえるのではなく，分析主体自身の定在を規定し，逆に分析主体がそれを規定してゆく場としてとらえるのである。したがってその成果は，きわめて一般的＝原理的であって，そのうえで，主体による操作を通じて運動する過渡的なものだということである。こうした方法の成果の全体が，『資本論』とそれを位置づけるマルクスの経済学批判体系である。

マルクスによって真に構築されたこのような視点は，しかし，かれ以後において無批判的に継承され，形骸化していったと考えられる。その過程は，いうなれば，古典学派が辿った途でもあった。レーニンの『帝国主義論』は，結果的には，このような状況に対して，それを方法的に訂正してゆく役目を果すものであったといいうる。レーニン自身，資本主義の一般的・原理的な側面と，過渡的・段階的な側面とを統一すべく意図していたのである。

しかし，レーニンの成果は，あくまで，一つの連続的過程の結果であって，それまでにさきに述

べたような長期にわたる帝国主義論論争が存在していることを無視してはならない。したがって，マルクス主義経済学における帝国主義論の意義——とりわけ方法論的な意義——を問題にするためには，ドイツを中心としたかの論争過程を辿る必要があろう。しかし，ここでは，それによって提起されたものとして重要なのは，社会主義的階級政党の戦術・戦略・綱領等にかんする諸問題や，独占の経済理論というようなものではなく，それらを一つの思想体系のうちに有機的に取り込む方法の問題であることを指摘するだけにとどめたい。このような角度からみるとき，問題を一面化せず，全体的把握をこころみた一例としてルドルフ・ヒルファディングを無視することはできない。すなわち，ヒルファディングにおける「最近の段階の資本主義」と，マルクスの確立した資本主義の一般的内的本性の把握との論理的結合は，このような方向の一つの具体化であったと考えられるからである。しかも，この結合はたんなる接ぎ木ではなく，資本主義の帝国主義段階の提示する諸問題，とりわけ，当面するドイツ革命の課題に照らして，過渡期の論理の構想を目指したものでもあった。かれの場合，過渡期の論理は，しかし二面的に考想された。一つは，流通的側面から資本家的経済構成をとらえることによって，流通過程の把握する形態的特質から，独占的な資本運動の展開をつかみとったこと。二つには，帝国主義を独占的な「集積」の進行の先端に位置づけるよりも，その政策的展開に示される現実的な本性の露呈現象を暴きたてることによって，理論分析の成果を主体的に受けとめる姿勢を呈示したことにあるといってよいであろう。

このような，ヒルファディング特有の過渡期の論理は，歴史の歩みを敏感に感じとりつつ，自身の立脚点の歴史的運動を直観的に世界史的推移としてうけとる歴史意識に裏打ちされたものであることを忘れてはならない。ヒルファディングが自己の思想を余すところなく盛った主著『金融資本論』(Das Finanzkapital, 1910, Wien) は，こうした歴史意識に支えられる過渡期の論理の表明だと考えねばならない。われわれの論究の対象もまた，当然この主著をめぐってなされねばならないことになる。それは，究極的に，ヒルファディングに固有の帝国主義論の内実を探究することとならねばならないであろう。

しかし，このような観点を貫くに当って，注意すべきことがある。それは，ヒルファディングが，マルクス以後の経済学説の展開のうちにしめる地位の問題である。とくに，ここで考慮されねばならないのは，過渡期の論理の具体的表出を，たんにドイツ資本主義の歴史的規定性の枠内におしとどめてゆこうとする見方，および，ヒルファディング経済学にある過渡期の論理を，いわゆる段階論という狭隘な領域でのみ解釈せんとする見方等である。(2) これらの立場が，今日までヒルファディングの「学説史」的評価において主流である点からして，ここで，それらを無視することはゆるされないであろう。これらの論点のここでの検討は，マルクス主義に立脚する経済学説の真の経済学史的評価の方法にとって，さけることのできない重要な問題を提示せずにはいないであろう。小論

注(2) これらの見解については，4, 5 節を参照されたい。

は，いわば，そうした類の問題提起のための準備的作業をなすものである。[3]

2. ヒルファディング経済学の構造

A. 端緒の問題

周知のごとく，ヒルファディングの経済学上の主たる著作は，『金融資本論』である。この書物をめぐっては，従来，多方面から論及がなされ，内容的には，多くの問題が解かれてきた。しかしながら，そこでは，『金融資本論』全体を覆ういわゆる流通主義的視点，また「組織された資本主義論」等が前提とされた評価——いうなれば，消極的評価——が支配的であったことは否めない。しかし，ヒルファディングの真の評価の確立は，流通主義ないし組織的資本主義といった，前提それ自体を支えてきたものが，一体，なにかをあきらかにすることなしにありえない。そこで，このような方向性を明確にするべく，まず，1904年に書かれた論文「カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起」（以下「問題提起」と略称）(„Zur Problemstellung der theoretischen Oekonomie bei Karl Marx“ Neue Zeit, 23 Jahrgang, Bd. I, 1904—5) に検討を加えておきたい。また，この論文に検討を加えるに先立って注意しておかねばならないのは，1903年にすでに，論文「保護関税の機能変化」が発表されていることである。

ヒルファディングは，この論文において，資本制生産の基礎的範疇としての「商品」を取りあげ，それが，経済学の端緒としてもつ意味を問う。それによって，経済社会の基本関係と，それの科学的認識・再構成としての経済学の性格・方法を問題にする。経済学の可能性にかんして，このように根底的に問われた理由は，当時のドイツ社会民主党内部での理論的創造の停滞もさることながら，マルクス価値理論に対して向けられた諸批判と，それにたいするマルクス派の対応の不徹底さとによることにあるという点をまず注意しておかねばならない。いわば，マルクス価値理論＝商品論を，古典派的な，ないしリカード的修正による価値＝価格論的な問題次元にとどめることに対する，ヒルファディングの批判をそこに見いださねばならない。[4] かくて，かれは経済学的認識対象を，社会的生産諸関係としながら，それを商品経済的社会関係を基軸として把握するということになる。このことは，「したがって，個々の交換行為のうちにふくまれているような，これらの対象物の相互関係を規制するところの法則の発見に成功したならば，それによって，社会の個々の成員を結合せしめる——この結合はかれらの経済行為の相互規定性を示すものである——ところの『社会の運動法則』が発見されたのではあるまいか？」[5] とのかれの指摘のうちに明白にされている。

注(3) ヒルファディングの思考対象としての過渡期を扱ったものに，野田弘英「ヒルファディング『金融資本論』の理論的性格について」九大「経済論究」第19号，1966年がある。

(4) P. M. Sweezy (ed.), Karl Marx and the close of his system, by Eugen von Böhm-Bawerk & Böhm-Bawerk's criticism of Marx by Rudolf Hilferding, 1949, xix f.

(5) Hilferding, R., Problemstellung. S. 104.

ヒルファディングにおいて，むろん，社会的な生産諸関係が，つねに論究の中心に置かれている。しかし，それは，交換の法則を具体的に，個々の歴史的社会形態に具体化される側面において貫徹する局面として問題にされているのである。その認識可能性は，いわば商品交換過程において初めて与えられるものとなる点において，商品論を端緒とする経済学の体系的論理構成の基軸的な地位に立つものとされることになる。しかし，このような考え方は，たんに商品論（価値論）に限定されるものではない。そのことは，ヒルファディングが，これを，「理論経済学」の課題として説いていることからも，あきらかにしうるのである。

経済学が，特定の社会的形態をとって現われる生産関係を考察の対象とするとはいえ，それらの諸関係の成立にかんして，また意識的に規制され，直接的に理解しうるものにかんしては，経済史が，これを担当する。理論的把握，すなわち，直観的把握によっては十分認識しえないものが，理論経済学の対象となる。社会の諸現象の背後に，人間の意識とは独立的にある何かを見いだそうとするとき，理論経済学が要請される。交換が，背後的関係（本質）の現象形態であるとすれば，それを規制するものの分析と，理論的再構成こそ，経済学，就中，理論経済学の端緒とならねばならないものなのである。

「私有制によって形式的に，分業の発展によって素材的に，その原基に分解された商品生産者の社会が，いかにして，一つの生産共同体に結集するか，かれらの個人的行動が，いかにして，社会的に必然的に条件づけられた行動に転化するか，という法則こそマルクスの問題としたものである」[6] とのかれの見解は，理論経済学の担うべき課題がなにであるかを明白にものがたっている。むろん，マルクスは，商品生産に基礎をおく生産社会を，一つの「生産共同体」としてとらえたことはなかった。むしろ，マルクスにあっては，生産共同体の瓦解こそが，そこでは問題とされていた。ヒルファディングはしかし，社会総体を，労働にもとづく共同体として，外的規制をうけつつ，[7] 個々の社会形態固有の内的規制（＝内的法則）をもっている。いうなれば，この外的規制が，社会の構成員によって意識されたものであるか，意識的なものを欠如しているかが，かれにとっての主要な関心をなしていたのである。ここには，一つの歴史的に規定され，特殊化された社会形態が，それに付着する外的規制因と，内的法則との統一のうえに成立し，この統一を意識的に，したがっておそらく「主体的に」ということになろうが，獲得してゆかねばならないという考え方が潜んでいるのである。だからかれは，つぎのようにもいう。[8]

「かくしてマルクスは，商品形態の分析によって，いいかえると，意識的統制を欠如している労働共同体の成員が，社会的物質代謝に必要なものにたいするかれの支配力を媒介として相互に関連しあうところの，歴史的・過渡的な様式がもっぱら問題である，ということの発見によって，同時に価値概念の内容を認識するにいたったのである。」

注(6) ibid., S. 107.　(7) ibid., S. 108.　(8) ibid., S. 111.

では，ここでいう，「歴史的・過渡的な様式」は，理論経済学の問題として，いかなる形態で具体化されるのであろうか。価値概念は，たんに，理論経済学の学問的体系の出発点をなすものではなく，その総体を意味するというとき，総体の具体的論理性はいかにとらえられるのであろうか。

B. 体系の構成

商品論の意義は，価値の本質規定を含むことによって，真に端緒たるに値いするものとなる。[9] ヒルファディングの場合，すでに述べたごとく，それは，交換における法則性の解明なる性格を持ちながらも，明確にされていたといいうる。理論経済学の課題と方法とは，まさに独自な商品論において，鮮明となったが，そのことはまた，かれの体系全体をも，特徴あるものとした。

ある論者は，最近，その興味深いヒルファディング研究のなかで，かれの経済学に対する態度，方法は，のちに1930年代に至っても不変である，と述べている。[10] 現在，われわれが入手しうるヒルファディング関係資料の状況からも，それを認めることは，それほど困難なことでも，逡巡を感じるようなことでもない。そうであるとするならば，ヒルファディングの主著『金融資本論』の論理構成を検討することによって，「問題提起」以来のかれの基本的構想を理解することができよう。

「本書では，最近の資本主義的発展の経済的諸現象を科学的に把握するという試みがなされる。すなわち，この諸現象を，W. ペティに始まりマルクスにおいてその最高の表現を見出す古典的国民経済学の理論体系に，組み入れるという試みである」[11] という冒頭の一節は本書の意図をきわめて明白にしている。ここにも，表現されているように，ヒルファディングの問題意識には，二つの方向がある。一つは，「最近の」(die jungste) 資本主義を問題にするという点，他の一つはマルクス『資本論』の体系と，論理的な繋がりを求め，それによって，当初の課題を果しうるとする点，である。この二つの観点の結合のうえに，はじめて明確な規定を与えられた「金融資本」(das Finanzkapital) の措定がなされる。したがって，『金融資本論』の全論理展開は，上記二論点の結合と，それによる金融資本範疇の理論的展開を主軸とすることになる。

このようにして，かれ独自の理論経済学の構成は与えられるのだが，それはまた，「問題提起」以来の理論経済学の課題の具体的展開でなければならない。このことは，『金融資本論』がまず，貨幣分析によってなされる(貨幣の必然性の解明)ことに端的に表明された。人間の生産共同体は二様の仕方で構成される。一つは，意識的に規制される，組織的社会 (共同社会) であり，他は，意識的規制を欠如した社会である。しかしかれは，意識的規制を欠く社会は，その内的法則それ自体から，

注(9) 価値の本質論の意義については，遊部久蔵『価値と価格』1948年，同『価値論争史』1949年，等を参照。なお，ヒルファディングの商品論を方法論との関連で問題にした高山 満「ヒルファディングにおける『理論経済学の問題提起』」「東京経済大学学会誌」第25号，1959，第26号，1960が併わせて参照されるべきである。

(10) W. Gottschlach, Strurkturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding, Berlin, 1962. S. 94.

(11) Hilferding, R., Das Finanzkapital, Eine Studie über die jungste Entwicklung des Kapitalismus. Europa Verlag Wien, 1968, S. 17,. 岡崎次郎訳(上) 9頁。

意識的に組織され統制される社会に移行してゆくものと考え，「理論経済学」の展開する個々の論理段階における範疇規定は，いずれも，このような方向性をもつものとされている。したがって，展開された範疇は，この意味からも過渡的なものとみなされ，ここでさきに掲げた二つの論点の統一がなされてもゆく。しかし，実際かれの論理展開にあって問題となるのは，このような視点が，弁証法的な・上向的な展開を辿るというより，「交換の法則」[12]を仮定し，つねに，その範囲内に止まり，全てがその点に帰着する論理構造をとっていることである。このような展開をなさしめた原因は，「商品」をもってではなく「貨幣」をもって展開を始めたというよりは，商品論それ自体の欠陥にあったというべきであろう。それは要するに，資本制生産と，商品生産との間の，たんに流通的・交換価値的・形態規定的同一性の側面ではなく，生産および再生産過程としての相互の係り合い，規定関係を見落したということになろう。

このことは，『金融資本論』が，固有の再生産論をもつことなく——好意的に解釈しても，無批判的に前提して——全体の展開がなされたことに結びつく。[13] 資本関係の究極的根拠は，たんに商品経済的関係にあるのではなく，その関係自体が，資本の蓄積過程，いわば，不払い労働にたいする請求権の不断の蓄積過程そのものにある。経済学的諸範疇は，この基礎過程の表現以外のなにものでもない。ヒルファディングにあっては，諸範疇は，その根拠に照らして把握されているのではなく，形態的な側面からのみとらえられている。したがって，論理の展開は，いちじるしく流通形態的側面に傾斜してなされ，[14] 貨幣の展開は，直ちに信用を導出せしめるのである。

ヒルファディングは，「『近代』資本主義の特徴をなすものは，かの集中過程であって，それは，一面ではカルテルやトラストの形成による『自由競争の止揚』において，他面では銀行資本と産業資本とのますます緊密になる関係において，現われる」としている。ここには，資本集中[15]と，それによるいわゆる金融資本の形成の理論的分析が示唆されているが，このことが，上記との関連で，どのような論理的展開の筋道をとってなされているのであろうか。

3. 『金融資本論』の論理構造と信用論

『金融資本論』第一篇は「貨幣と信用」と題され，第四章以降で，信用論が展開されている。周知のごとく，ヒルファディングのこの部分の展開に対しては，「流通主義」なる評価がなされてき

注(12) ibid., S. 26, 訳, (上), 17頁。

(13) ヒルファディングの構想した再生産論を，資本循環論として措定しうるという見解がある。(大野英二，住谷一彦「ドイツ資本主義と資本類型」(上)・(下)『思想』1964年2月，1965年2月。) とくに，大野氏は，ヒルファディングが，信用論に先立って，資本循環論を展開したとされる。(大野英二，『ドイツ資本主義論』1964年，434頁)

(14) しかし，資本それ自体を流通形態的に把握することについては，ヒルファディングは，まったく明確な展開を与えていない。

(15) Hilferding, a. a. O., S. 17, 訳, (上), 9頁。

た。それは，「社会的流通必要価値」に規定された貨幣理論からする金自由鋳造禁止下の貨幣流通の法則を，いわゆる「交換の法則」の解明の一端としてあきらかにしようとすることに由来しているとされてきた。しかし，そのような評価は，貨幣・信用論を，ただ，貨幣流通の側面から批判しようとする意図を示しているが，それは，批判者の側の信用論理解の不十分さをも同時にあきらかにしている。[16] かれの信用論にたいする批判の視角は，第一篇のみではなく，第二篇以降の展開との有機的関連においてあきらかにされるべきなのである。というのも，すでに述べたとおり，ヒルファディングには，最近の資本主義の発展を理論化し，それを既存の体系に組み込むという意図があるからである。この観点からすると従来の批判は，その一面のみをとらえた批判，換言すれば，既存体系——マルクス『資本論』体系——に組み込もうとする側面を重視したものということができる。かくて，このような批判の視角では，ヒルファディングが，金融資本として説こうとした，「最近の資本主義」の発展と，それへの信用論的アプローチの意義は，軽視されるか，ほとんど見過ごされてしまう。それはまた，かれが信用論に付与した方法的意義，すなわち，資本集中・独占形成・金融資本支配・帝国主義の展開なる諸事態を，信用論を媒介として展開し，そのような方向を定めて，信用論を独自に構成するという企図をも無視することとなるのである。

信用論は，『金融資本論』全体の要点である。このことは，第二篇，「資本の動員，擬制資本」とくに，第七章「株式会社」の意義を軽視するものではなく，そこでの株式会社の展開が，かれ独自の信用論を前提にすることなく展開しえないからである。また，かれの金融資本規定も株式会社論を前提とするものではあるが，したがって，それも，信用論の構造を無視してはなりたたない。このように信用論の論理構造が『金融資本論』体系の中心にあるなら，その内的構造はいかなるものであろうか。

それを端的に言うなら，信用論が，ヒルファディング独自の再生産論理解を反映し，その具体的顕示とされていることにある。

ヒルファディングの信用論の特徴は，一口に言うならば，貨幣流通・紙券流通に立脚する信用貨幣流通を前提とし，いわゆる「資本信用」形態を軸とした信用形態論からなるといえよう。そこでの信用形態は，一面において，信用諸手段の一つとしての手形流通・銀行券流通を中心とした信用形態として，他面では，再生産過程の循環運動中において形成される遊休貨幣の資本への転化をなす信用形態という二面から把えられている。そして，流通信用，資本信用を，それぞれの側面に対応したものとして措定し，後者を，実際上，銀行信用の内容として理解し，そこに流通信用をも包含せしめることとなる。[17]

注(16) 「ヒルファディングは，流通主義ならびに新カント派的方法論に立脚して，その信用「理論」を建設している。」（ローゼンベルグ，栁村二郎訳『資本論註解』第7巻，496頁）。ちなみに，ローゼンベルグの所説には，ヒルファディングの意図はまったく考慮されていない。

(17) Hilferding, a. a. O., 5. Kap.

このような信用形態の理解は，共通な根拠にたつものではなく，信用形態のそれぞれの機能面を表現する形態的特徴を，そのまま，形態の総体に置き替えたところでなりたっている。信用は，資本蓄積の全過程にとって，主要な槓杆をなすものであるが，信用形態は，再生産過程において必然的に形成される再生産過程それ自体への阻害要因を除去，軽減し，それに基本的に規定されつつ資本の集中過程を押し進めるものであって，前者の貨幣（資本）の節約と，後者の資本集中が，個々ばらばらに信用の個々の具体的形態のうえに配分されているわけではない。したがって，ヒルファディングのごとく，流通信用を資本信用に解消してゆくような展開は，信用が本来的に資本の再生産過程に規定されるこの関係を理解しないものだと考えねばならない。しかし，ヒルファディングの展開は，積極的には，資本集中過程を具体化するところの信用形態が，究極のものとして考察されたのである。ここには，かれなりの再生産論が存するのではあるが，再生産過程が示す必然的傾向としてそれをあきらかにするための視角は不問に付されたのである。資本信用に収斂する信用形態は，かくて，資本の集中運動を専一的に実現するところの形態として把握されるに至る。

「資本信用とは，移転によって遊休貨幣資本から機能貨幣資本に転化さるべき貨幣の移転である。資本信用は，支払信用のように流通費を節約するのではなく，同じ貨幣基礎の上で生産的資本の機能を拡張するのである」[18]との指摘において，ヒルファディングは，資本信用が，いわゆる商業信用的基礎から離れて，特異な運動をなすことをのべている。しかし，その基盤は，いわゆる銀行信用本来の信用関係を超えたところでなされる。ヒルファディングは，そのために「産業集積」が進展することを，前提と考えているのだが，[19] 実際上それは事実として前提されるにとどまり，論理的には，まったく不明なままにされている。

生産的資本への転化は，産業資本家においては，二重の仕方でなされる。すなわち，流動資本としてそれを転化するか，固定資本として転化するか，である。[20] 産業集積の進展は，後者すなわち資本の固定化をよりいっそう促進する。このような「資本の固定化は，他面ではまた，預金の不断の払戻可能性のための準備金および保証金として役立つべき，銀行のより大きな自己資本をも必要とする。」[21] 銀行が，資本信用供与の中心として，つねに優越的資本力を維持するために，銀行自体が，「資本集積」＝資本集中をなさねばならない。銀行資本自体の集中化の結果として，いわゆる資本動員も可能になる。このような論理展開の延長線上に，ヒルファディングの擬制資本論，株式会社論が位置づけを与えられている。[22] したがって，構成上においても，第二篇は，銀行資本が，自己の資

注(18) Hilferding, Das Finanzkapital, S. 109—10, 訳，(上)，137頁。

(19) ibid., S. 123, 訳(上)，156頁。

(20) ibid., S. 113, 訳(上)，142頁。

(21) ibid., S. 113, 訳(上)，143頁。

(22) これについては，拙稿「ヒルファディング株式会社論にかんする一考察」「三田学会雑誌」第57巻第1号 1962年，および「信用制度と株式会社——信用論における『株式会社』の位置——」「三田学会雑誌」第62巻，第6号 1969年等を参照されたい。

本力を創業利得の獲得を軸とした，銀行利得の増大として，いかに達成するかの分析をもって終っているのである。

すでに信用論において，ヒルファディングは，産業資本と銀行資本との融合関係を，銀行信用の特異な性格たる資本信用関係によってあきらかにした。そこでは，産業資本の側での株式会社形態をとっての資本集中の進展は，むろん前提されているのであるが，信用論の論理からすると，それは資本信用としてのみ説かれたといいうる。したがってヒルファディングは，一面，金融資本的結合構造の根底に株式会社を認めながら，それは，銀行資本による資本信用の全行程のうちに包摂され，現実的・生産的資本の蓄積から必然的に要請されるものとしては展開されなかった。したがって，その後の独占資本分析においても，独占形成の基礎過程，とりわけ競争次元の諸問題にたいしてはほとんど触れるところなく，競争への対応としての独占の具体的形態論が主軸とされてしまったのである。すなわち，さきに述べたごとき，信用論の特徴は，信用論とともに『金融資本論』の中核をなす資本動員論，その具体的展開としての株式会社論を，一方では，擬制資本の形成・その独自の運動とともに創業利得の発生を経済的な範疇として説いて，資本動員の主体たる銀行の資本力の増大根拠をあきらかにするものとして，他方において，産業資本家の機能変化を前提に導入することにより，中小株主層の貨幣資本家化を説いて，配当の利子化を唱道し，株主＝擬制資本所有者をして貨幣資本家とみなすものとして説いた。このようなかれの株式会社論の二面的性格は，取引所論と相俟って，株式会社企業形態の資本蓄積・資本集中過程に規定される側面の分析を等閑に付させることに帰着したのである。

上記のごとき信用論と，それにつづく株式会社論の展開は，『金融資本論』第三篇以降の展開を独占資本の形態論に直接的に移行させる役割を果した。独占形成への蓄積論的な分析も，さらに競争論的な分析も，周知の独占の形態分析に代置されてしまった。その端緒は，株式会社形態の支配的な段階での競争を，たんに配当の利子化を理由とした利子率による資本の均等評価の問題として把えたことにある。そしてまたこのことは，独占諸資本家間の利害の対立・競争を通じての，資本蓄積に規定された支配関係から，ただ政策的次元での支配の遂行として帝国主義を構想してゆくという結果に至らざるをえなかったとも考えられるのである。

だからと言って，ヒルファディングの分析の理論的欠陥を指摘することは，何らかれの正当な評価となりえない。上記のごとき体系構成において，理論経済学にかんする独自の方法が，マルクスのそれを引き継ぐという形で貫徹されていながら，同時に，眼前において展開する「最近の資本主義」の諸現象に説明を与え，それによって法則的な運動を理論的に導出しようという実践的意図が貫徹していることをも見出してゆかねばならない。このことは，ヒルファディングが，冒頭の一節に明示したように，マルクスによって仕上げられた経済学の体系に，自らの分析成果を論理的に接ぎ木せんと意図しつつ，それが同時にヒルファディングの立脚する資本主義の現実からのまさに歴

史的な要請に促がされ，その現実を論理に強力に引きつける形において，自己の体系を築きあげねばならなかったことを意味している。かくて，ここに，きわめて興味深いヒルファディング研究の論点を見出しうるのであって，それは，また，マルクス以後のマルクス主義的経済学の辿った足跡を正当に，真に学説史的に評価する絶好の材料だといいえよう。以下では，従来の代表的ヒルファディング評価に検討を加えつつ，その論点のいっそうの明確化をはかりたい。

4. マルクスからヒルファディングへの理論的継承

すでに明らかにしたごとく，ヒルファディングには，理論経済学にかんする二様の問題意識が示されていた。それは，一面では，ヒルファディング自身の把握する現実，そこから要請される実践的課題に関連し，他面では，マルクスからの理論的継承に関連している。これら二つの側面が，しかも，『金融資本論』において，その独特な信用論を核として展開されていることに注意を払わねばならない。

しかし，ヒルファディングの論理展開自体これら両側面を統一することに成功していないとする見解は，従来からおこなわれている。その最も代表的なるものとして，宇野弘蔵氏の所説をあげることができよう。

宇野弘蔵氏によれば，ヒルファディングは，その『金融資本論』において，金融資本なる範疇を展開したが，それを，マルクス『資本論』体系に「組み入れる」としたことによって，金融資本という段階規定に属する問題に，原理論的規定を無区別に混入した。むろん，ここで，宇野氏は，いわゆる氏の段階論と原理論との区別と相互の関連を念頭に置かれているのである。宇野氏は，ヒルファディングによる金融資本論が実質的に段階論的内容を与えらるべきことをあきらかにした点については評価を惜しんではいない。ただ「原理論に対して段階論を明確に区別して展開しうる時期を知りえなかったマルクスの『資本論』に，段階論的規定を混入した原理論の展開のあるのは止むをえなかったにしても，ヒルファディングではそれはもはややむをえないというものではなかったのである」[23]という角度から，段階論的な展開を意識的になしえなかったヒルファディングを批判される。そして全体としては，つぎのごとく評価する。[24]

「マルクスの『資本論』は，経済学の原理論を完成せしめる客観的条件としての資本主義社会の確立によって，原理を体系化することになったのであるが，金融資本の時代としての没落期の出現による段階論をもって，体系の完結性を確実にすることはできなかった。ヒルファディングの『金融資本論』は，たしかにこの新たなる資本主義の発展段階を規定することになったのであ

注(23) 宇野弘蔵『経済学方法論』1962年，93頁。
(24) 宇野，前掲書，102頁。

る。」

ここに明示されているように，「金融資本の時代としての没落期」なる規定は，ヒルファディング自身のものではなく，宇野氏のものである。かつ，この没落期の意識が，事態の科学的認識に作用するごとき段階でなければ，宇野氏のいわれる段階論は成立の根拠を与えられない。はたして，ヒルファディングに，この種の意識——科学的認識活動を規定する意識——が存在したであろうか。宇野氏が，自らそれをあきらかにされることなく，ヒルファディングの体系を，原理論と段階論との混同として批判されるとすれば，それは，宇野氏自体の立場・方法を絶対化し，それを機械的にあてはめただけのものになるであろう。

宇野氏によるヒルファディング批判は，上記のような，「混同」の指摘を中心として，おおよそ，三点からなっているものとみることがきる。まず，ヒルファディングが原理論を科学的に，正しい意味で論理的に展開していないこと，そして，第一篇を中心とした原理論的展開は，マルクスによってすでに与えられたところを，かれ独自の段階規定のために予め説明したにすぎず，しかもそのさいマルクスにおける不十分さを，そのまま踏襲した，という点。宇野氏によれば，「経済学の原理的規定に適当な基盤は，資本主義の発展とともに成熟してくるのであるが，しかしそれはいつまでもそうであるというものではない。そしてそのことが金融資本の特殊の研究を必要とする所以をなすのである。したがって貨幣の一般的規定をもって，金融資本論の序論となすことは，二重の誤りをおかすものといってよい。現に原理論としては貨幣の一般的規定からは金融資本という，特殊の資本の形態への発展ではなく，資本の一般的規定へと展開されなければならない。それを金融資本という特殊の資本形態と関連づけて貨幣を論ずることになると，逆に貨幣の規定自身が一面的にならざるをえない[25]」ということになる。

第二点は，金融資本規定と関連して第二篇以降でなされる展開は，原理論としてなされるものであるか，それとも段階論としてなされるものであるかが明確になっていない。原理論は，擬制資本から株式資本の規定を与えうるのであるが，「株式会社の産業企業における普及としての，その売買を展開することはできない[26]」とされる点である。すなわち，これは，「原理的規定から直接的に段階論的規定を展開しようとするもの[27]」なのである。

第三点は，段階論的規定をなすための基本的要因を把握していながら，そこから直ちに，「現状分析」的課題を説き，結局段階的規定[28]そのものを不十分なままにしたことである。

以上三点にわたる批判点は，宇野氏の独自な方法論からするならば，きわめて当然のことといいうる。また，この批判は，ある意味では，ヒルファディング経済学の性格を顕示するのに役立って

注(25) 宇野，前掲書，84頁。
(26) 宇野，前掲書，88頁。
(27) 宇野，前掲書，89頁。
(28) 宇野，前掲書，100頁。

いるといってよいであろう。また，古典学派を批判することによって自己の体系を構築したマルクスに比較すれば，マルクス→ヒルファディングなる過程が，単なる理論の継承に終り，真に発展させられていないという点を主張したことも，一つの問題提起としては無視することができない。しかし，ヒルファディングは，しばしば述べるごとく，二様の課題を提起しつづけていたのであって，そのことは段階論を意図的に展開しえなかったことによって否定されるべきではない。宇野氏が，第二点において述べているごとき観点は，ヒルファディングにとっては，理論的にも，実践的にも焦眉の課題なのであった。それは，目前の独占資本の独自な運動・蓄積様式を前提にしつつ，既成の概念でともかくも説明しえねばならなかったのである。株式会社論が，信用論的次元でまず把えられ，そこに改めて，資本集中要因を導入したとき，銀行と産業との特異な結合関係が理解され，それに改めて，資本集中要因を導入したとき，銀行と産業との特異な結合関係が理解され，それは，株式会社形態に還元される形式においてであれ，独占資本的運動の一面をとらえることに成功した。そのことが，いわゆる過渡期の論理の貫徹をも可能にしたのである。

さかのぼって，第一点にかんしても，宇野氏の批評は，ヒルファディングの経済学の方法にかんする思想を無視したものといわねばならない。『金融資本論』第一篇は，貨幣の必然性から信用形態論までが展開されるが，それは，宇野氏のいわれるように段階的規定に必要な範疇の，その限りでの説明に終っているものではない。もし，宇野氏の主張が正しいのであれば，宇野氏自身ヒルファディングの商品論に批判を加えられるまでもなかったであろう[29]。第一篇は，さきに述べたごとく，ヒルファディングの理論経済学の根本的な考え方が反映，具体化されているのである。外的規制と内的規定との統一に，特殊歴史的な生産関係の理論的叙述の理想状況を想定するかれは，ある生産諸関係が内的に有するこの統一への必然的傾向を探りだすことを課題とし，ここに経済学の可能性を求めたのである。この考え方は，組織された資本主義論にとどまるものではない。それは，商品経済的生産関係がまず内的に必然的に備えるものとして，あきらかにされているのである。「交換の法則」を見いだすということは，理論的分析にとっての課題に終るのではなく，資本主義の最近における発展が，それ自身提示してゆかねばならないものを理論的に顕現せしめるものとされていたのである。

「経済学の研究が，原理論と段階論と現状分析とに分化して行なわれるということは，歴史的過程を理論的に把握しようとする社会科学に特有なる方法を示すものといってよい[30]」という宇野氏の主張，これが，ヒルファディングの確認したところでないこというまでもない。したがって，ヒルファディングのいう「交換の法則」＝社会の運動法則の発見という視角は，宇野氏の独自の方法的観

注(29) だから，宇野氏によってなされたヒルファディング貨幣論批判（「『貨幣の必然性』——ヒルファディングの貨幣理論再考察」同氏『資本論の研究』所収，1949年）に対しても，ここでの批評と同一のことをいいうるであろう。
(30) 宇野，前掲書，101頁。

点と形式論理的に等価であるといいうるにすぎない。かくて，宇野氏の方法をもって，ヒルファディングは解釈しえたとしても，批判はなしえないといわねばならない。

5. ヒルファディング経済学の現実的・歴史的立脚点——まとめ——

前節にみたように，ヒルファディングの『金融資本論』を中心とした経済学の体系は，『資本論』の体系を受けつぎ，新たな事態に理論的説明を与えることを意図した。このことは，宇野弘蔵氏によっては，段階規定の展開を目指すものとして一面評価され，他面，原理的規定を混入させたという点においては批判された。そのさい，宇野氏自身が認めるように，金融資本の時代を，資本主義の没落期と意識し，それによって段階論を構想し，さらに原理的規定をあきらかにしうることが必要であった。宇野氏の批判が，真に批判として意義をもちうるとすれば，ヒルファディングの歴史認識そのものをまず検討しなければならなかったのである。いいかえるならば，帝国主義ドイツの歴史的把握と，その理論的把握との関連が，なお，問われねばならないのである。

ヒルファディングの現実認識ないし帝国主義ドイツにたいする歴史的把握は，すでに，1903 年，„Die Naue Zeit“ 誌上に発表された論文 „Der Funktionswechsel des Schutzzolles. Tendenz der modernen Handelspolitik“（「保護関税の機能変化　現代貿易政策の傾向」）において，明瞭に示されている。ここでヒルファディングは，三つの点から，ドイツ資本主義を歴史的に規定し，その展開の条件となった保護関税の機能変化を論じる。それらは，基本的国内階級対立の組織化——工業・産業資本家とユンカー勢力との結合，および，労働者運動の社会主義的綱領をもつ政治組織によっての組織化を内容とする——を前提とし，まず，産業資本家と「金融資本」家との対立として，[31] 第二に保護関税の機能変化とそれによる世界市場分割競争へのドイツ産業資本の積極的進出，そのための保護関税による超過利潤の確保。したがって，保護関税は，国内市場育成を中心としたものから，国際的な「搾取手段」[32] に転化することになる。第三には，このようなドイツ資本主義の帝国主義的転換が，世界経済恐慌への多大の刺激要因となったことを指摘する。[33]

ドイツ資本主義が 1850 年代に産業革命を推しすすめた背景には，いわゆる関税同盟に始まる保護体制があったことは，ここで改めて指摘するまでもない。ヒルファディングは，そうした保護関税体制を，ここでは明確にドイツ資本主義の再生産構造の支柱とみ，その機能変化を通じて，再生産構造それ自体の編成替えをみている。しかも，それは，ユンカー的・ブルジョア的な特殊ドイツ的支配体制のもとでの，巨大産業独占と，大土地所有者の利害の結合の上に築かれた特異な競争の

注(31) Hilferding, R., „Der Funktionswechsel des Schutzzolles. Tedenz der modernen Handelspolitik“, Neue Zeit, 1903, S. 275.

(32) ibid., S. 279.

(33) ibid., S. 278.

体制として把握された。この体制が，国内的に自由な競争を揚棄し，独占化の方向を強化し，国家権力と密着して，独自の蓄積をすすめるところに，資本主義自体の否定の方向をよみとっている。それは，あくまで社会主義社会へ向っての「前段階」としてなのである。[34] ここにヒルファディングにとって固有な意味での帝国主義論の原型をみることができる。また，その把握の方法は，修正派のごとく，理論的に把握しきれない現実としてではなく，理論的把握のいっそうの展開を要請される対象の変化としてなのであった。この「機能変化」にさきだって，同じ „Die Neue Zeit“ に „Zur Frage des Generalstrichs“ (1903) を発表して，エンゲルスが『フランスにおける階級闘争』序言にのべたいわゆる議会制度の発展を軸とした状況の変化の認識のなかから，プロレタリアートの闘争の戦術は，ブルジョア的政治制度という客観的条件にのみ支配されるのではなく，闘争主体が，その条件をどう把握しているかによるとして，ドイツ資本主義における議会制度のもつ限界を明確にし，現段階においてこそまさしく，徹底した主体的闘争戦術が論議さるべきであることを主張している。[35] これらを通じてみるならば，ヒルファディングの把握は，単純にドイツ資本主義固有の歴史的規定性のもとで，分析対象に制約された論議だとすることは困難であることが明白になる。ヒルファディングには，一面，ドイツ資本主義固有の特殊性に規定された階級状況の認識が貫くと同時に，他面，資本の論理が必然的に，このドイツ資本主義の歴史的制約を打破して，帝国主義として抗闘・競争せねばならない世界資本主義的発展に規定された側面の認識が貫く。そして，これが，『金融資本論』に結実するかれの経済学の体系構築の前提とされていることを看過してはならない。この点との関連で，ヒルファディングを，ドイツ的資本主義のしかも，その特殊な側面に規定されたとする所説がある。以下簡単に上記論点との関連で，今日有力なヒルファディング解釈となっている大野英二氏（ないし住谷一彦氏）の所説を検討しておこう。

大野英二氏は，住谷氏とともに，ドイツ資本主義を，「18 世紀中葉過ぎ以降の Absolutismus の場合にナポレオンの制圧下に余儀なくされた上からのブルジョア革命開始（1808—13 年）を起点とし古手の『地方的プロシア的』三月革命（1848 年）の後，外見的立憲主義（1848—66 年）並びに似而非ボナパルティズム（1870 年）の形態の下に構成を備へるに至りし所の，ユンケル経済の支配と零細土地所有農民の局面とをもつ独逸資本主義」[36] という規定を基本的に承認され，そのうえで，ドイツ

注(34) ibid., S. 280.

(35) エンゲルスとの関連については，前掲降旗論文を参照されたい。ヒルファディングとの関連について氏はつぎのように述べておられる。

「かくて所謂修正主義論争にあっては，『資本論』批判者，擁護者何れも，エンゲルスの設定した理論と歴史把握の独自の枠組みのうちにとじこめられることによって，ながらく不生産的な論議に終始することになった。かかる枠組みから脱して，新たな経済・社会現象の発生を資本の蓄積様式の変化との関連において有機的に把握し，資本主義の段階的発展を理論的に取扱うという視角が開かれるには，尚ヒルファディングの『保護関税の機能変化，現代商業政策の傾向』の登場をまたねばならなかった。」

ヒルファディングに関する限り，正当な指摘というべきであろう。

(36) 山田盛太郎『日本資本主義分析』1934 年，2 頁。

資本主義の再生産構造を支える資本循環を体現するものとして三つの資本類型を提示される。それは，技術者的生産者類型（資本類型Ⅰ），問屋制的生産者類型（資本類型Ⅱ），領主制的生産者類型（資本類型Ⅲ）である。[37] これらは「ドイツ資本主義の経済循環を把握しようと企図しているのであり」[38] 少なからず，地帯的特殊性と対応して存在し，産業革命以降のドイツ資本主義の発展を規定したというのである。しかも，独占期においては，「主導的な基軸産業は消費手段生産部門から生産手段生産部門へ推移しているとしても，この三『資本類型』は再編されつつも，独占資本の三類型を構成する基礎をなすもの」[39] とされ，独占資本の三類型が析出される。このような「経済循環論」的視角からする資本類型論に立脚して，それらと，ヒルファディング『金融資本論』の理論構成を「その立論の現実的基盤がドイツ資本主義の経済循環を構成する諸『資本類型』のうちで，どのような資本の蓄積と循環の型態をあらわしていたかを確定」[40] するという角度から問題にされる。

大野氏によれば，ヒルファディングの理論は，「資本の循環→資本の固定化→資本の動員→独占の形成→金融資本の範疇規定なる構成をとって展開され，資本の循環過程における信用の役割の検討がその起点をなしていることに止目すべきである」[41] とされる。ここに銀行による産業支配，銀行の「独占の確立を志向する傾向」[42] を強調することになるとされる。このようなヒルファディングの論理の運びは，「1899 年の『穀物と鉄』との同盟，1902 年のそれの再編といった，いわゆる『農工同盟』の展開にさいして，親ユンカーの路線を推進して，帝制ドイツの支配者たるユンカーの階級的利害と妥協的な経済政策を支持し，大銀行の『工業政策』のバック・アップのもとに形成されたライン・ヴェストファーレン石炭シンジケートや製鋼連合のごとき，カルテルの二重価格政策によって収奪される利潤を独占利潤の一源泉とするライン・ヴェストファーレン石炭＝鉄鋼業の主流に代表されるような独占資本類型」[43] に着目したもので，「まさしく『結集政策』の路線の展開過程でユンカー階級と同盟したブルジョアジー上層をなすところの，独占資本の一つの類型の蓄積と循環の形態がヒルファディングにより金融資本として把握されたのである。」[44]

かくて，大野氏は，ヒルファディングの理論構成の現実的基盤が，独占資本類型Ⅱにあるということをあきらかにされ，「金融資本」範疇の歴史的規定性とも併わせて強調されるのだが，こうした把握に，基本的に，いくつかの疑問を提示しなければならない。

すでにしばしば述べてきたように，ヒルファディングは，二重の問題意識で『金融資本論』の展

注(37) 大野英二，住谷一彦「ドイツ資本主義と資本類型」(下)『思想』1965 年 2 月，102 頁。
(38) 大野英二『ドイツ資本主義論』1965 年，446 頁。
(39) 大野，前掲書，446 頁。
(40) 大野，前掲書，432 頁。
(41) 大野，前掲書，434 頁。
(42) 大野，前掲書，438 頁。
(43) 大野，前掲書，444 頁。
(44) 大野，前掲書，443 頁。

開をなそうとした。その課題の実現には，就中，帝国主義的ドイツ資本主義の基本的問題を理論的に解明してゆかねばならなかった。そのための一つの方向が，資本集中の過程—独占資本の運動の解明であり，他の一つは，ドイツ帝国主義のまさに世界市場的関連によってかもし出される帝国主義の問題であった。この両者が，かれにとっては，論理的に理論経済学の問題として説明されてゆかねばならなかったのである。

ヒルファディングは，これにたいして，さきの大野氏の指摘にもあったごとく，特殊ドイツ的資本の再生産機構に着目した。そしてそこに，特殊ドイツ的な型での銀行資本（信用銀行）と産業株式会社企業との密接な結合関係をみた。ヒルファディングはしかし，そこに問題の解決を止めえなかった。いいかえれば，ドイツ資本主義の歴史的規定性による型や，資本類型として示すことを意図したのではなかった。かれはあくまで原理の展開としてそれを達成しようとした。ここに『金融資本論』のもつ方法上の大きな，しかも困難な問題が生じるのである。大野氏等のヒルファディング評価についてまず問われるべきは，こうした，論理体系を支える方法と，現状認識との関連を無視される結果になるのではないか，ということである。いわゆる「理論的部分」と，帝国主義論との展開の質的差異をどのように理解するかという問題が，[45] 大野氏のごとき把握によっては，問題としても存在の余地がないことにならないであろうか。ヒルファディングの対決した現実は，たんなる一つの特殊な経済循環＝資本類型によって解明しうるような限度を超え，全経済生活を巻き込むところの，世界的規模での資本の運動に規定されたものであることは，『金融資本論』にとっても前提とされていたのであり，それだからこそ，ヒルファディングは，それをまず理論的に一般的にとき明かす必要を痛感したのである。だから，『金融資本論』では，現実それ自体が示す国際的関連を，より鮮明に，かつ直截に展開しうる方法と，範疇とが取りあげられざるを得なかったのである。

*　　*　　*

いままで述べてきたごとく，ヒルファディング経済学のもっている二重の問題提示は，今日，それを体系的に評価するさいにきわめて解決困難な課題を残すことになる。というのは，小論のはじめにのべたごとく理論的継承と，現実的基盤は，つねに一つの学説に統一されるべきものであり，その統一の仕方に，その学説展開の独特の方法が存在している。その方法が具体的にいかなるものであるかは，両側面の統一の論理構造の解明をまつことなく不可能だからである。そして，ヒルファディングの場合，この統一は，必ずしも論理的になされていないものであることは，ここでとりあげた代表的評価（解釈）のうちからもあきらかになる。しかし，この統一を論理的な無理を犯して達成することにもまして，資本主義社会の転換期を科学的に，かつ主体的に把握しようとする，ヒ

注(45) これについては，星野 中，「ヒルファディング『金融資本論』の基本的構造とその問題点 —— 研究史上の位置との関連において——」（内田義彦，小林 昇篇『資本主義の思想構造』1968 年）261 頁を参照。

ルファディング独自の歴史意識に支えられた思想体系を，看過してはならないであろう。従来の代表的解釈がこの点の検討においてなお不十分なもので，ヒルファディング経済学の総合的な，真に経済学史的評価は依然として残された課題であるといわねばならない。 (1969—7—5)

〔付記〕 平井 新教授からは学部・大学院の講義・演習以来ご懇切なるご教示を賜った。小論が，その学恩の何分の一かに報いうるものとなるならば望外の幸である。

ジャン・ジョレス

——経済思想を中心に——

村田 光義

近代フランスにおけるすぐれた政治家にして教育者，ジャーナリストであったジョレスは，同時にまた最高の社会主義思想家の一人でもあった。とくに，かれの社会主義啓蒙家として果した役割は高く評価されてよい。(注1) したがって，かれの思想は多方面にわたっているが，本稿ではかれの経済思想に焦点をしぼってみたい。ジョレスはモロー (Frédéric Mauro) のいうごとく，経済理論家(テオリシアン)ではなく経済教義家(ドクトリネール)であり，(注2) 哲学者として，歴史家として，経済というものにアプローチしたため，かれの経済分析は理論的説明に欠けるうらみがあり，その意味で，かれは「経済史家が経済学者であるという程度において経済学者」であった。そこでかれの経済に関する考察の中心となったものは，集産主義の目的と社会主義体制下での所有の形態，ならびに集産主義実現の手段といった問題であった。以下においてこれらの諸問題をマルクシズムとの関連においてとらえてゆくことにし，他の点については後の機会にゆずりたいと思う。

(1)

ジョレスが社会主義というとき，それはフランス独自の社会主義をさすものであった。そして，この場合フランス独自の社会主義とは，当然にマルクシズムとの対比において把握された，フランスの伝統に培かわれた社会主義ということに他ならない。かれはいう。マルクシズムが社会主義，集産主義のすべてではない。フランスの社会主義は，フランスの諸思想と伝統から生まれるものであり，フランス人が人間性においてその固有の外観と自立性をもつように，その固有の外観と自立性をもつものでなければならない。(注3) と。このときかれの頭の中に浮び来るものは，大革命以来のフランス社会主義者の人びとであり，フランスこそ，革命が生まれ，その情熱を今もひきつぐ国であるという革命の正統性にたいする誇りであったにちがいない。バブーヴィズムは革命の否定ではなく，反対に最も大胆な脈動であり，フーリエリズム，サンシモニズムも，近代生活の否定・制限ではな

注(1) ジョレスの生涯と，当時のフランスの状況，およびかれの教育思想については，拙稿「ジャン・ジョレスの教育思想」(学校教育研究所年報〔1968〕所収) を参照されたい。

(2) Mauro, Frédéric; La Pensée économique de Jean Jaurès. (Auriol, Vicent; ed., Jean Jaurès (1962) p. 70.

(3) La Dépêche du Toulouse; 25 sept. 1893.